



令和8年度 果樹情報 第14号

(令和8年10月2日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (9月後半、果樹研究所)

平均気温は、第4半旬が20.0℃で平年より1.9℃低く、第5半旬が20.9℃で平年より1.6℃高く、第6半旬が18.3℃で平年より0.5℃低く経過しました。

この期間の降水量は91.0mmで平年比118%と平年より多くなりました。日照時間は58.3時間で平年比72%と平年より少なくなりました。

2 土壌水分 (9月30日現在、果樹研究所)

9月30日時点の土壌水分(pF値：果樹研究所なしほ場：草生・無かん水)は、深さ40cmで1.8、深さ60cmで1.7となっており、概ね適湿状態です(図1)。(深さ20cmは4月25日～5月7日、5月16～19日、9月25～30日はデータ欠損)

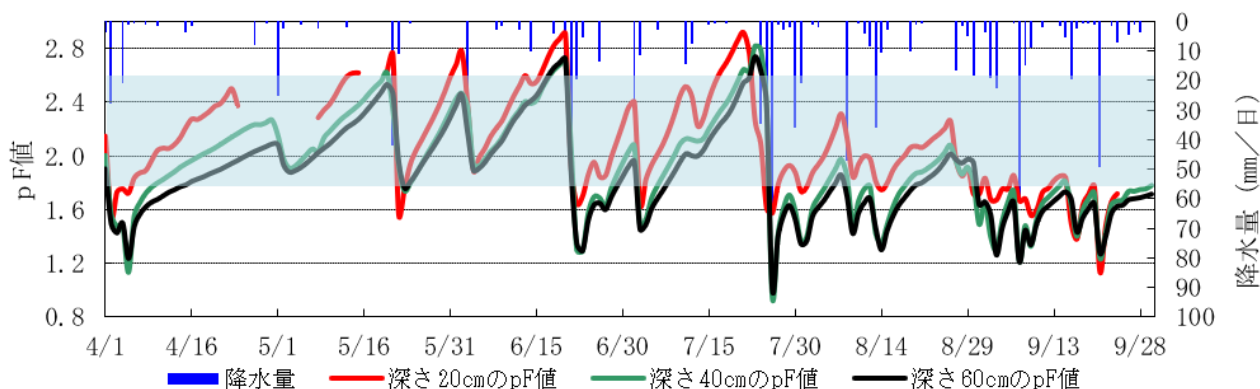


図1 土壌pF値の推移(果樹研究所なしほ場：草生・無かん水)

図中の網掛け部は、適湿の範囲(pF1.8-2.6)

3 発育状況 (10月1日現在、果樹研究所)

(1) なし

ア 収穫状況

「あきづき」の収穫盛期は9月24日で平年より3日早くなりました。果実重は483gで平年並、糖度は11.4° Brixで平年より低くなりました(表1)。

「ラ・フランス」の収穫盛期日は9月29日で平年より4日早くなりました。果実重は381gで平年より大きく、糖度は13.2° Brixで平年並でした(表1)。

表1 なし主要品種の収穫状況

品種		収穫開始日			収穫盛期			収穫終期			果実重(g)			糖度(° Brix)		
		本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
幸	水	8/13	8/22	8/18	8/22	8/27	8/23	8/26	9/ 1	8/28	409	393	353	11.6	12.4	13.1
豊	水	8/31	9/ 9	9/ 4	9/ 9	9/15	9/12	9/14	9/21	9/16	453	439	482	12.0	12.9	13.9
二十世紀		9/ 9	9/15	9/11	9/ 9	9/18	9/13	9/ 9	9/22	9/29	488	418	366	10.9	11.0	11.8
あきづき		9/16	9/24	9/17	9/24	9/27	9/26	9/28	10/2	9/16	483	477	528	11.4	12.9	13.5
ラ・フランス		9/29	10/3	10/2	9/29	10/3	10/2	9/29	10/5	10/2	381	314	370	13.2	13.0	14.8

注) 平年値は、1996～2025年の平均。

イ 成熟状況

「ラ・フランス」の満開後164日における成熟調査の結果は、果実硬度が11.2lbs.で平年並、デンプン指数は3.8で平年より高く、糖度は12.7° Brixで平年並でした(表2、図2、3)。

表2 「ラ・フランス」の成熟状況

満開後 日数	硬度(lbs.)		地色		デンプン 指数		糖度 (° Brix)		リンゴ酸含量 (mg/100ml)	
	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
140	14.0	12.6	2.1	2.5	5.0	4.8	11.6	11.7	0.26	0.27
146	11.6	12.3	2.3	2.7	4.9	4.6	12.2	11.8	0.28	0.25
150	15.8	12.0	2.7	2.8	4.6	4.4	12.3	12.1	0.31	0.26
155	11.4	11.8	2.6	2.8	4.5	4.2	12.2	12.3	0.25	0.25
164	11.2	11.1	3.1	3.1	3.8	3.4	12.7	13.0	0.25	0.24

注1) 平年値は、1996～2025年の平均値。

注2) 西洋ナシのデンプン指数:染色が濃いほど未熟。

指数1:10%以下染色、指数2:30%程度染色、指数3:50%程度染色、
指数4:80%程度染色、指数5:100%染色

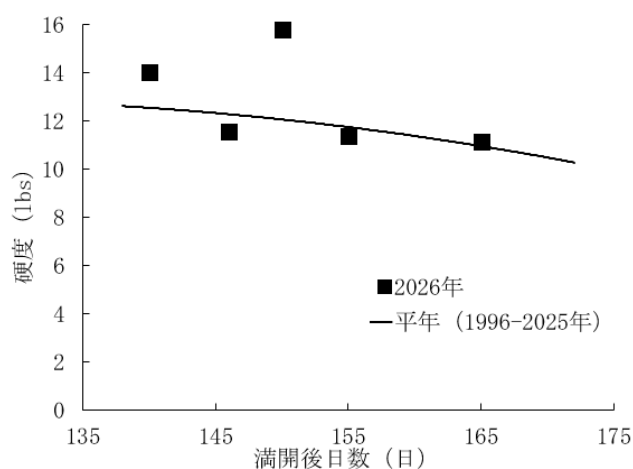


図2 「ラ・フランス」の果実硬度の推移

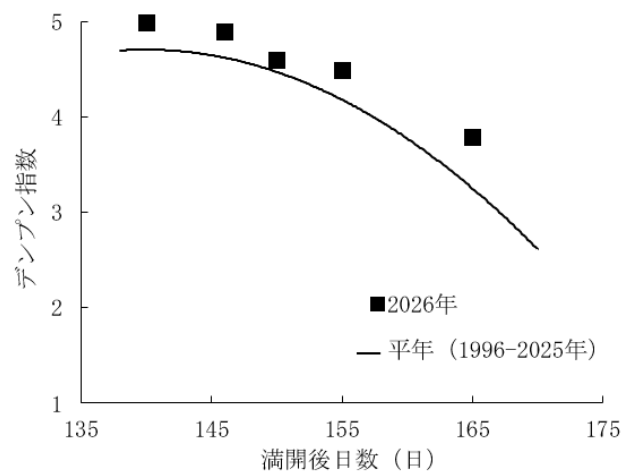


図3 「ラ・フランス」のデンプン指数の推移

(3) りんご

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「ふじ」は縦径が 83.5 mm (平年比 104%)、横径が 89.7 mm (平年比 103%) と平年並の状況です。

満開後日数で比較すると、平年よりやや大きい状況となっています。

イ 成熟状況

「ふじ」の満開後 164 日 (9 月 30 日) における成熟調査の結果は、果実硬度が 13.5 ポンドと平年よりやや低く、糖度は 13.1° Brix で概ね平年並、リンゴ酸含量は 0.46mg/100ml で平年より高く、デンプン指数が 3.5 と平年概ね平年並となっています (図4、5)。果皮中クロロフィル含量は概ね平年並、果皮中アントシアニン含量は概ね平年並でした (図6、7)。

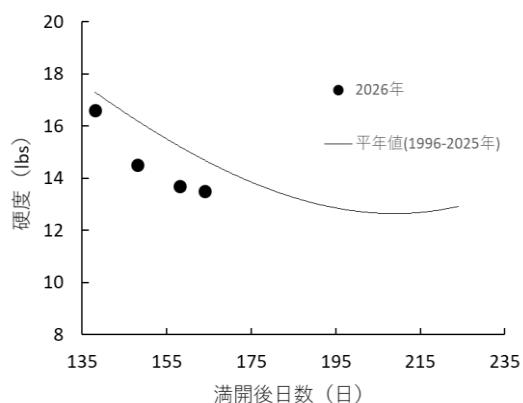


図4 「ふじ」の果実硬度の推移

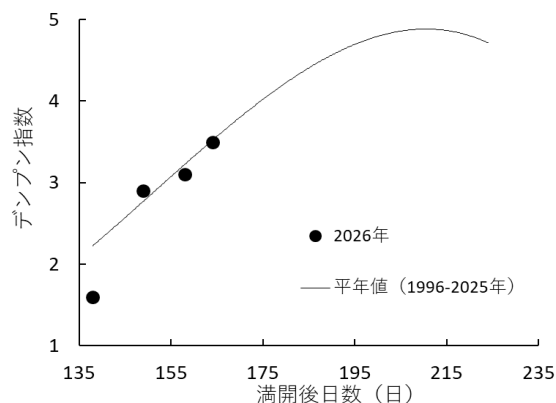


図5 「ふじ」のデンプン指数の推移

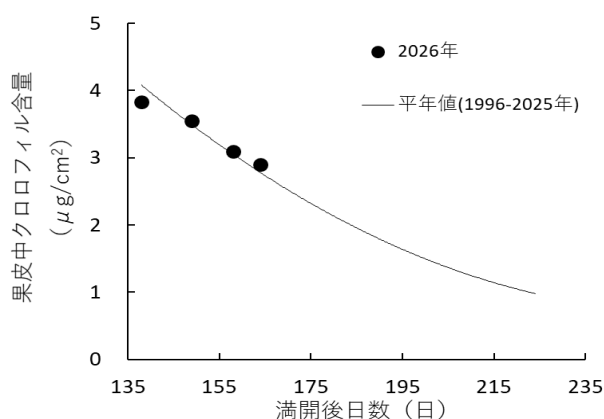


図6 「ふじ」の果皮中クロロフィル含量の推移

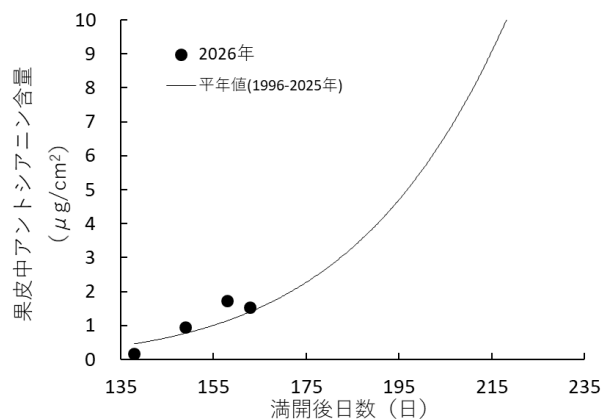


図7 「ふじ」の果皮中アントシアニン含量の推移

ウ 「ふじ」の裂果発生状況

満開後 164 日（9 月 30 日）における「ふじ」／マルバ台果実の外部裂果率は 3.3%で過去 3 年間と比較して同等～やや多い傾向でした。内部裂果発生率は 13.3%と 2023～2024 年と比較して少ない傾向でした（表 3）。

表 3 りんご「ふじ」の裂果発生状況（満開後 160 日ころ）

調査樹	樹齢	外部裂果率 (%)				内部裂果発生率 (%)			
		2026	2025	2024	2023	2026	2025	2024	2023
ふじ/マルバ台	24	3.3	0	0	3.3	13.3	20.0	3.3	23.3

(4) ぶどう

ア 「シャインマスカット」（短梢栽培）の成熟状況

満開後 116 日（9 月 28 日）における成熟状況は、果実品質は、糖度が 15.3° Brix、酒石酸含量が 0.31g/100ml、糖酸比が 49.5 となっています（表 4）。

イ 【参考】「シャインマスカット」（長梢栽培）の収穫状況

収穫盛期は 9 月 24 日で、過去 3 年間の平均より 8 日遅くなりました（表 5）。果実品質は、過去 3 年間の平均より果皮色及び糖度が低い状況です（表 6）。

表 4 「シャインマスカット」の成熟経過

調査日	満開後 日数	果房重 (g)	1粒重 (g)	果皮色 (カラーチャート値)	糖度 (° Brix)	酒石酸 (g/100ml)	糖酸比
8/25	82	608.6	12.8	1.5	13.1	0.67	19.4
9/14	102	614.3	15.1	1.5	14.6	0.41	35.4
9/28	116	577.1	14.2	2.0	15.3	0.31	49.5

表 5 「シャインマスカット」（長梢栽培）の収穫状況

収穫開始日		収穫盛期		収穫終期	
本年	3 年平均	本年	3 年平均	本年	3 年平均
9/16	9/15	9/24	9/16	未	9/18

表 6 「シャインマスカット」（長梢栽培）の果実品質

果房重 (g)		1粒重 (g)		果皮色 (カラーチャート値)		糖度 (° Brix)		酒石酸 (g/100ml)		糖酸比	
本年	3年 平均	本年	3年 平均	本年	3年 平均	本年	3年 平均	本年	3年 平均	本年	3年 平均
671.4	529.4	15.5	12.9	2.2	3.2	16.9	18.2	0.27	0.23	62.0	82.1

注 1) 3 年平均は、2021～2023 年の平均値。

注 2) 下線部は、現時点までに調査した果実品質の平均値。

4 栽培上の留意点

(1) りんご

ア 「ふじ」の収穫前管理

1回目の葉摘みは、果面が30%程度着色したところから果実に接している葉を中心に数枚程度実施しましょう。2回目の葉摘みは、個々の果実に光が当たるように丁寧に実施しましょう。

玉まわしは、陽光面の着色が進んだ段階で実施し、反対面の着色向上を図ります。その場合、1回だけでは不十分なので、さらにもう1回実施しましょう。

反射シートの敷設は10月上旬頃から開始し、遅れないように実施しましょう。枝の下垂が目立つ骨格枝等には枝吊りや支柱立てを実施しましょう。

イ 中生種の収穫

地色、着色、デンプンの抜け、果実の肉質、食味等から総合的に判断し、品種特性に応じて適期収穫に努めましょう。

(2) ぶどう

ア 冬肥の施用

県施肥基準に従って実施しましょう。冬肥の施用は、落葉期の11～12月に行いますが、秋肥(9月)を施用していない場合は、早急に実施しましょう。「巨峰」成木における年間の施肥の目安(10a 当たり成分量)は、窒素が6kg、リン酸が8kg、加里が8kgです。窒素の目安は、秋肥、冬肥、春肥でそれぞれ2kgとなっています。樹勢が強い場合は窒素の施用量を減量しましょう。

なお、堆肥等は冬肥時に併せて施用し、その成分量を考慮して冬肥の施用量を調整しましょう。

イ 間伐・縮伐

樹冠が拡大し、枝が混み合っている場合には、早めの間伐や縮伐を実施しましょう。間伐や縮伐は、まだ葉が残っている収穫終了直後に行うと、枝の混み具合が判断しやすくなります。間伐や縮伐を行うことにより、残った枝葉に良く光が当たるため、養分蓄積にも有効です。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病害

ア モモせん孔細菌病

本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、収穫が終了した園では降雨前の秋期防除を徹底し、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。

秋期防除の薬剤は4-12式ボルドー液、又はICボルドー412を30倍で使用するか、クレフノンを100倍で加用してコサイド3000を2,000倍で、又はクレフノンを100倍で加用してムッシュボルドーDFを500倍で使用する、2週間間隔で散布しましょう。ただし、コサイド3000及びムッシュボルドーDFは、高温時に使用すると落葉等の薬害を生じることがあるので注意しましょう。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。2回目以降の散布では、薬剤のかかり具合を確認し、新梢管理を見直しましょう。

イ ナシ黒星病

秋期防除は、翌年の伝染源となるりん片への感染予防に重要です。重要な防除時期は、りん片生組織の露出(図8)が多くなる頃(果樹研究所では10月上旬～11月上旬)となります(図9)

(参考：令和4年度普及に移しうる成果(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachm ent/566356.pdf>))。薬剤散布は、オーソサイド水和剤80を600倍で使用する、2週間間隔で2～3回散布(キャプタンの総使用回数に注意)し、最終散布は落葉率80%頃を目安に実施します。

また、薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、薬液が棚上まで十分量かかるよう丁寧に行いましょう。

なお、9月30日時点の果樹研究所「幸水」予備枝におけるりん片生組織の露出芽率は16.3%で、例年並となっています。

薬剤散布前には徒長枝の整理等の新梢管理を行い、薬剤の散布むらをなくしましょう。2回目以降の散布では、薬剤のかかり具合を確認し、新梢管理を見直しましょう。



図8 露出した芽りん片生組織（枠内）

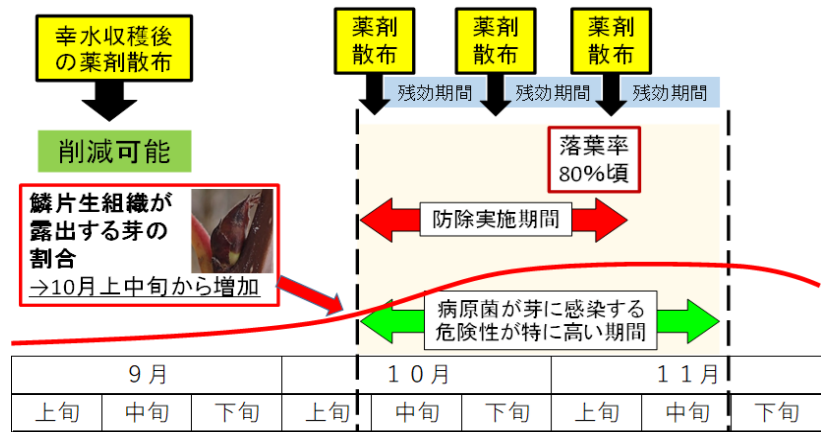


図9 なし及び病原菌の生態に基づく秋期防除の考え方

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。

発行：福島県農林水産部農業振興課 農業革新担当 TEL 024(521)7344

(以下のURLより他の農業技術情報等をご覧ください。)

URL: <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36021a/>